一億の號泣

中垣　秀夫　陸自69

終戦記念日の8月15日、熊本県護國神社において「終戦記念日平和祈願祭」が厳粛に斎行された。

これまでは「英霊追悼祭」として営まれてきたが、坂本泰彦宮司によれば「追悼とお祭りが一緒になることに、どうしても違和感がある」として、「今年から思い切って〝平和祈願祭〟にした」との由であった。コロナ禍の影響もあり、規模を縮小した各界代表者のみの参加による平和祈願祭であったが、坂本哲志、木原稔、西野太亮・各代議士（本人）をはじめ多くの参議院議員（代理）、県会議員、市町村議員の参加を得て、厳粛な中にも盛大に行われた。

熊本偕行会からは牧勝美名誉会長が常務総代として参加され、会長の私が会を代表して参加、各団体の代表として、新しく会長に就任した田尻宏行・郷友会長（防大同期）及び本会監事である森崎淳一・西南の役顕彰会長とともに玉串拝礼を行った。

祭礼の最後に恒例の坂本宮司による挨拶があったが、その中で涙声になりながら紹介されたのが、高村光太郎が終戦の翌日の朝に岩手花巻で詠んだ「一億の號泣」である。高村光太郎は『智恵子抄』の作者として有名であるが、このような詩も詠んでいた。インターネットで調べたところ、この詩は昭和40年8月、靖國神社の社頭に掲示されたとの由である。

この詩は殆ど世に知られていないので、関係者の参考に資するため、以下に全文を再録して紹介する。

一億の號泣

綸言一たび出でて　一億號泣す
昭和二十年八月十五日正午
われ岩手花巻町の鎮守　鳥谷崎神社
社務所の畳に両手をつきて
天上はるかに流れ来る
玉音の低きとゞろきに
五體をうたる
五體わななきて　とゞめあへず
玉音ひゞき終りて又音なし
この時無聲の號泣　国土に起り
普天の一億ひとしく
宸極に向かってひれ伏せるを知る
微臣恐惶　ほとんど失語す
ただ眼を凝して　この事実に直接し
苟も寸毫の
曖昧模糊をゆるさゞらん
鋼鐵の武器を失へる時　精神の武器
於のづから強からんとす
眞と美と到らざるなき
我等未来の文化こそ
必ずこの號泣を母胎として
其の形相を孕まん

（注）
綸言＝天子の言葉。みことのり
玉音＝天皇の声の尊称
五體＝身体全部
普天＝天下
宸極＝天子の居所
微臣＝主君に対し臣下が言う自分の謙称
恐惶＝恐れかしこまる
寸毫＝極めて少ない事
曖昧模糊＝はっきりしない、ぼんやりした様子
形相＝顔つき。様子
孕む＝胎内に子が宿る

せっかくの機会なので、熊本県護國神社と熊本偕行会の関係についても触れておく。護國神社が斎行主催する春と秋の例大祭及び8月14日夕の「みたま祭り」と終戦記念日平和祈願祭並びに偕行会年次総会に際しては直前に会長が代表して玉串料を奉納して昇殿参拝することとしている。

この他に隊友会、郷友会、偕行会が合同で主催して、遺族や現職隊員代表を招き、年頭の新年の集いを実施するとともに、秋には英霊及び殉職隊員の慰霊祭を実施している。特に新年の集いは、それまで各会毎にホテルで開催していた新年の集いや賀詞交歓会に替えて開催しているので、護國神社はもちろんであるが、自衛隊幹部、国と地方議員、それぞれの会の役員等から大変喜ばれている。また殉職隊員の慰霊祭については、その後に例年、遺族会としての行事を行うとの由で、遺族の世話をしている地方協力本部関係者から感謝されている。

また6月の年次総会には西方総監の講話、12月の偕行懇話会には第8師団長の講話をお願いしているが、護国神社宮司には両会とも案内状を送付するとともに、時には卓話をお願いしている。更に、これらの恒例行事とは別に、大きな節目毎、更には熊本地震からの復興のために広く募金を募り、纏まった寄付をしてきた。

ところで、坂本泰彦宮司と私とは昭和20年生まれの同年齢であり、個人的にも格別の仲である。ある団体の会長就任依頼のため、二人で熊本の有力者を訪ね説得に当たったこともある。昔から南京事件や慰安婦問題や第6師団の戦史について話し合うことが多かったが、最近では憲法と政教分離、台湾海峡とバシー海峡の戦略的意義、自衛隊の継戦能力と強靭性、自衛隊と政教分離、あるいは自衛隊音楽隊の境内での演奏の是非、中露北朝鮮を含む万国旗を境内に展張することの是非、自衛隊を詠んだ和歌を社殿に展示することの是非等について頻繁に話し合っている。私の話は具体的で解り易いとの由で、坂本宮司からはいつも「中垣会長はイザと言うときの俺の知恵袋バイ」とおだてられている。

懸案は境内の西側に広がる梅林の取り扱いである。70㍍四方位の広さの国有地で熊本市が管理している。しかし名目だけで実際は放置されているため、雑草が伸びて景観を乱す上に、熊本城の見物者の不法駐車場になったりもしていた。隣接する護国神社にしてみればいい迷惑である。

そこで熊本偕行会は熊本市の出先機関である熊本城事務所に掛け合い、許可を得て梅の苗木50本くらいを労働奉仕により植林した。今では3㍍くらいの高さに成長し、雑草も生えなくなり、見事な梅園となった。2月には花を香らせ、5月には大きな実をつけ、参拝者や近隣の人を喜ばせている。

一方、熊本地震からの復興や桜町再開発に伴い、行き所をなくした各種の遺跡や文化財が、熊本市西事務所に集積され、ブルーシートを掛けて放置されている。荒木貞夫陸軍大将の碑文や歩兵第23聯隊記念碑などは十数㌧もある巨石で取り扱いも容易ではない。坂本宮司は何とかしたいと考えているが、護国神社の境内は既に満杯の状態で設置場所がない。そこで梅林を護国神社に払い下げてくれれば、そこに設置出来ると発案した。私としては、これは文化財保護の観点からも熊本市にとって良い話なので直ちに払い下げが可能と思っていたが、熊本市は「あそこは委嘱を受けて市が管理しているだけで、国有地なので国（財務局）に言ってくれ」との由であった。それでは財務局に掛け合うと、「あそこは国のものだけど、管理しているのは熊本市だから、市に言ってくれ」と取り合ってくれない。

こんな小さなところにも、官僚主義、事なかれ主義、無責任体制、当事者能力欠如、タライ回しが蔓延しているのかと、驚きかつ感心した。小役人は仕事をしないためなら、全知全能を振り絞って屁理屈をこねるのである。ケチな話で紹介するのもおこがましいが、「一億の號泣」ならぬ「中垣の号泣」である。